

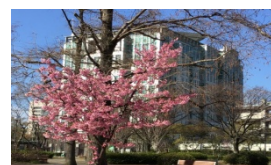
これから5年

大阪に大学院以来38年ぶりに暮らすようになり、だんだんと生活にも慣れてきた。淀川区東三国のUR賃貸に「沈滞」し、緑少なく味気ない景色だが、生駒山あたりから昇る朝日を



「定点観測」している。自宅前6階の階段から、桜を見降ろすと心がなごむ。

大阪で暮らすようになり、すこしだけ若返ってきた気がする。日曜日をのぞき、ほぼ毎日、大阪市立大学の学術情報総合センターなどの図書館に通っている。地下鉄であびこ駅まで行き、そこから歩く。1時間ほどかかるが、図書館通いにより、生活リズムを保ってきた。こうして出歩くと、1日1万歩近くに。心身ともに健康をたもっていきたい。40数年前の院生時代に戻ったような感じだ。京都にも近くなったので、宮本憲一



先生とご一緒の研究会に参加して、若い研究者らと交流するようになり元気が出てきた。

これから、とりあえず5年。どう生きていくか。まずは健康で年齢を重ねていきたいが、退職後に学んできたこと、原稿として書きためてきたことを、一冊の本にまとめてみたい。昨年末、京都での研究会で久しぶりに報告した。その報告要旨の冒頭から。

公共事業と社会資本を長年にわたり研究してきた一人として、最近の動きは衝撃的で、看過できないものがある。

12月14日、安倍政権は沖縄の民意を無視して、あの世界遺産にもなり得る辺野古の海に土砂を投入した。米軍新基地建設という「公共事業」により、絶対的不可逆的な損失が発生しつつある。またリニア中央新幹線の建設により、南アルプスの山々に巨大なトンネルが掘られ、取り返しのつかない環境破壊が進んでいる。新基地、リニアにしる、絶大な環境への影響や必要性から、公共事業の「公共性」が鋭く問われる。

福島第一原発事故から8年近く経つ。国土と生活を根こそぎ破壊したが、「脱原発」の世論をよそに原発再稼働に拍車がかかる。原発という高コストで高リスクの集権的な電力供給システムは、「共同社会的条件」を形成する社会資本のあり方、その存在意義を根本から否定するものだ。原発事故により多くの人が苦しんでいる一方で、東京五輪や大阪万博を起爆剤にして、さらなる経済成長を夢見る政治と経済。いまだ「お祭り型公共投資」に期待を寄せ、財政や環境を度外視した大規模開発が繰り返される。夢洲を会場に予定する大阪「カジノ万博」は、大阪経済や財政、くらしと環境に深刻な影響をもたらすであろう。愛知万博を構想からウォッチしてきた者として、黙ってはおれない。

こうした問題意識から、『公共事業と財政』の続編を構想したい。さしあたり「都市と社会資本」をテーマに、集中して作業をすすめよう。これから5年の第一歩として。

(2019年4月1日)